

女性僧侶の社会参加実践に関する研究—ジェンダー視点からの民族誌的調査

Social Participation Practices of Female Buddhist - Ethnographic Survey from a Gender Perspective

大学院人間文化創成科学研究科

ジェンダー学際研究専攻 D3 宍 婷梅

1. 要約

(和文)

仏教には女性出家者が男性出家者に対して守るべき8つの戒律(八敬法)が定められているため、極めて女性差別的な宗教としての批判が浴びせられてきている。一方で、近年では、世界的にジェンダー平等が訴えられているなか、仏教寺院や仏教者自身が男性中心主義的な仏教の在り方を自省的に再考し、これまで周縁化されてきた女性僧侶や寺族(住職の家族)の地位向上を図ろうとする動きが顕在化してきている(川橋 2012)。こうした動向の先端にあるのが台湾の仏教である。台湾では高学歴の比丘尼(仏教で出家した修行者が守らなければならない戒律である具足戒を受けた女性、男性は比丘である)も多く、彼女らが台湾のみならず、海外布教による世界各地で仏教教団の多様な社会参加実践を主導して、仏教を新たな次元に導こうとする事例が注目されている。本研究が対象とする台湾のA山はその一例である。本報告はジェンダーの視点から、台湾南部のK市に位置するA山の女性仏教学院に焦点を当て、A山がどのように布教人材を育成するのか、そしてそれが女性僧侶の社会参加実践とどのように関連しているかを明らかにすることである。本調査研究では、まず資料収集によって、A山の仏教学院の創立経緯と趣旨、発展歴史などを整理した。そして、参与観察を通じて、現在の女性仏教学院の1日のスケジュール、シラバス、学院のカリキュラムと授業のあり方を一定の把握をした。また、仏教学院における空間による厳しい男女峻別がわかったほか、学院では実践と理論を組み合わせ、女性仏教学院の学生のリーダーシップを養う可能性が見られる。

(英文)

In Buddhism, there has been criticism directed at its extremely discriminatory nature towards female, citing the eight precepts (at̥ṭha garudhamma) that female monks must adhere to about male monks. On the other hand, in recent years, amid calls for gender equality around the world, there has been a noticeable trend within Buddhist temples and Buddhists themselves to introspectively reconsider the male-centric nature of Buddhism. Efforts are being made to elevate the status of marginalized female monks and chief priest's families (Kawahashi 2012). This movement is particularly prominent in Taiwanese Buddhism. In Taiwan, there are many cases of highly educated Bhikkhuni (A woman who has received the precepts that monks must follow, men are Bhikkhus), and there are examples of these

women leading the various social participation practices not only in Taiwan but also in other parts of the world through overseas missionary work, and trying to take Buddhism into a new dimension. This research focuses on A Mountain in Taiwan, which is one example. From a gender perspective, this report focuses on the female Buddhist Institute of A Mountain, which is located in K City in southern Taiwan, and trains missionary personnel, aims to clarify how A Mountain cultivates missionary personnel and how this is linked to the social participation practices of female monks. This investigative study, first, compiled the establishment background, objectives, and developmental history of A Mountain's Buddhist institute through data collection. Additionally, participation observation and interview research have revealed the institute's daily schedule, syllabi, curriculum, and way of class. It was observed that the institute strictly segregates genders within its spaces, but also emphasizes a combination of practical and theoretical teachings, showcasing the potential to foster leadership among female students in the Buddhist institute.

2. 現地調査期間：2023年11月22日～2023年12月5日

3. 調査背景

2001年3月31日、台湾で行われた「人間仏教薪火相伝」という研究会では、台湾のフェミニストである釈昭慧法師は女性差別と考えられている八敬法の条文を引き裂いて「廃止八敬法」運動を提唱した。それは台湾仏教界におけるジェンダー平等に関する議題に関心を集めるきっかけとなった。今回の調査対象であるA山は1960年代に台湾で成立し、1980年代台湾の民主化運動とともに発展拡大してきた仏教教団である。A山は人間仏教（社会にある仏教）という理念を実践しながら、教育、慈善、芸術、修行、メディアなど多面的な社会参加実践を行なっている。グローバル化の波に乗るA山は1980年代末から海外へ進出し、フィリピン、マレーシアなど発展途上国を含み、現在全世界200以上の道場を設立している。A山が発表した資料によって1977年から2004年にかけてA山で具足戒を受けた出家者の人数は2466人であり、そのうち77%が女性だった。その中には布教人材を育成する仏教学院での教育を経て、専門的な知識を身に付け、その後に海外留学を経験している比丘尼も多い。仏教学院から卒業してA山の行政機関に要職に勤め、あるいは海外に派遣される比丘尼が少なくない。後者の場合、1つの寺院をリードしたり発展途上国に教育施設を作ったりしている。高い専門性を備えた比丘尼がA山の現在を支えていると言えるだろう。多元化するグローバル社会を背景に、ジェンダーの視点を重視し、国際協力、さらには観光産業にも深く関わり、社会参加実践に新たな宗教の貢献の可能性を探る現在の台湾仏教において、比丘尼の存在は重要性を増している。

4. 調査目的

本調査の目的はジェンダーの視点から、台湾南部の K 市にある布教人材を育成する A 山の女性仏教学院に注目し、A 山はどのように布教人材を育成するのかを明らかにすることである。また、それはどのように女性僧侶の社会参加実践、とりわけ発展途上国における布教活動と連動しているのかを明らかにすることである。さらに、今回の調査を踏まえ、これから台湾の教団である A 山の多様な社会参加実践を多面的に考察し、とりわけその社会参加実践の中核を担う比丘尼の実践に注目し、ジェンダーの視点から仏教の現代化の特徴を実証的に分析していく。

5.調査方法

今回の調査は文献・資料の収集、参与観察と半構造化インタビュー調査を主な調査方法として研究を行なった。具体的な内容は以下の通りである。

まず、A 山の仏教学院と海外布教、とりわけ発展途上国における布教活動に関する文献資料、パンフレット、報告書などを収集する。そして、布教人材の育成の現状を把握するため、現在の仏教学院に訪問し、参与観察を通じて仏教学院の 1 日のスケジュール、シラバス、学院のカリキュラムと授業のあり方を一定程度に把握する。また、A 山最初に仏教学院が設立された寺院は今年再開され、当時の仏教学院を紹介するコーナーが設置されている。展示される資料を補足データとして仏教学院の状況を共時的に捉えながら、仏教学院の現状を考察する。さらに、どのように女性僧侶の社会参加実践、とりわけ発展途上国における布教活動と連動しているのかという問題について、関連する担当者に一時間ほどの対面の半構造化インタビュー調査を実施した。

6.調査結果

(1) 仏教学院の基本情報

①創立経緯

A 山は仏法を広げる人材を育成するため、1960 年代に台湾南部の K 市にある五階ビルの S 寺院で仏教学院を創立した。2 年後今回の調査地へ移転した。S 寺院は今年 6 月に再開されており、教育施設ではなく道場として信者の参拝地となっている。S 寺院の三階に仏教学院の歴史を紹介するコーナーがある。当時の仏教学院の学生募集要項によると、仏教学院の趣旨は「仏教を取り仕切って、仏法を広めて、品行優れた人材を育てる」ことがわかった。また、当時は施設の原因で女性のみ受け入れた。一方で、男性仏教学院は 1980 年代に成立され、1990 年代に今回の調査地へ移転した。

②A 山における仏教学院の位置付け

A 山の最高行政機関は「宗教委員会」である。「宗教委員会」は全体的な発展政策を作成しており、教育院を含む 5 院と 14 会という 19 ヶ所の部門を管理している。そして、仏教

学院は教育院に属している。その組織構造に基づく仏教学院の教育方針から、A山の思想を窺えるだろう。また、仏教学院はA山の布教人材を育成する施設なので、A山の心臓と考えられている。

③学生の獲得先と発展途上国における多様な社会参加実践

女性仏教学院の学生の獲得先は主に4つの種類がある。第一は、A山の青年団体のメンバーである。第二は、第一と重なっている部分もあり、短期的な出家生活を体験する活動などのイベントに参加した方である。第三は、台湾における全ての寺院では仏教学院が設立されるわけではないので、他の寺院の青年はA山の仏教学院で授業を受ける例もある。④マレーシア、インド、ベトナムなどにAの海外寺院を経由して台湾の女性仏教学院に入学する人である。

A山は発展途上国における道場を設立して多様な社会参加実践を展開している。教育の面では大学の設立、仏教学院または仏教に関する科目を開設する。慈善の面ではマレーシア、フィリピンとトルコの自然災害や、パラグアイでの医療援助、そして、経済危機にあるスリランカの民衆への物質供給と医療設備の提供など多岐にわたる社会参加実践を行なっている。こうした社会参加実践の中では比丘尼の能力を発揮しながら、多くの仏教に関心を持つ若者を育成し、そのうちの一部が台湾の仏教学院の学生となる。

④空間から見る女性仏教学院

女性仏教学院はいくつかの建物で構成されて、全体的に長方形に見える。東側と西側の2つの建物の一階は教室である。東側の建物の二階と三階は出家者の寮であり、西側の二階と三階は在家者の寮である。出家者は剃髪、普段黒い服を着る。在家者は剃髪しなくて、普段グレー服装を着る。北に隣接する建物は観音菩薩をまつり、女性学生の修行地として使われている。南側の建物は学院の正門であるほか、オフィススペースとしても機能している。ほかには、図書館、パソコン室、座禅室などもある。空間から見ると、在家者と出家者は修行地と教室が共有であるが、居住地は厳しく分離されている。

⑤一日のスケジュール

仏教学院は集団生活である。一日のスケジュールは規定されている。学生は複数のグループに分かれ、それぞれのグループはリーダーによって指導される。グループリーダーは交代制である。以下は女性仏教学院の一日のスケジュールである。

表1 女性仏教学院の一日のスケジュール（カギカッコ内は専門語である）

5:30	起きる
5:42	列になる「排班」
6:15	朝ごはんを食べる「过堂」
7:00	女性仏教学院に帰る
~7:40	掃除
~8:20	休憩
8:30~10:20	授業
10:30~	修行
11:00~	専門の服をきる「搭衣」
11:15	昼ごはんを食べる「排堂」
12:00~12:20	学院に戻る
12:40~13:20	自分で修行
13:30~15:20	授業
15:30~16:20	事務・掃除「出坡」
16:30	間食
16:30~17:45	在家者がシャワーを浴びる
16:30~17:00	出家者がシャワーを浴びる
17:00~17:30	出家者が座禅
17:45	時刻を知らせるため、木板を打つ「打板」
18:00	晩ご飯を食べる
19:00 まで	全てのことが終わる
19:00~21:30	週に三回夜の授業
21:45	鼓を打ち鳴らす
21:50	鐘を打ち鳴らす
~10:06	座禅
10:06~	休み「安板」「开大静」

（2）人材育成に関連するもの

女性仏教学院では人材育成は理論と実践の組み合わせる傾向が見られる。

①女性仏教学院のカリキュラム

女性仏教学院には、3年間の正規コースと4ヶ月間の短期コースがある。前者では、一年次には、基本的な仏教学の知識を教える。仏法概論、仏教史、創始者の思想、宗門思想などの科目が提供される。二年次には、専修コースと国際コースに分かれる。前者は仏教研究人

材を育成するコースと、寺院の管理人材を育成するコースにさらに分かれる。後者は学生の英語力を向上するため、英語で授業を行なっている。基礎仏教知識と仏典の翻訳などの科目があり、海外布教の人材の育成を狙っている。また、国際情勢の分析科目もあり、これはこれから海外布教と国際協力に役立つだろう。2022年には新型コロナウイルスの影響で、3ヶ月間のオンライン布教人材育成コースが開催された。一方で、男性仏教学院は学生数が少ないため、女性仏教学院と異なり、少人数制の授業が行われる。教員については、最初他の学校や研究所から先生を招待したが、現在A山の僧侶が布教経験を積んで成長してきたので、仏教学院は現在A山の海外布教経験がある女性僧侶を招き、彼女らの布教経験などを教える。例えば、物質を寄付するために戦地に赴いた女性僧侶が自らの経験をシェアすること、発展途上国における孤児、不登校の子ども、非行少年など社会的に周縁化された子どもたちを支援した経験を本にして出版することによってみんなに共有する。このような方法によって学生たちは発展途上国支援の知見とノウハウを蓄積している。

②実践としての法会

今回の調査は年間で最も大規模な法会が開催されていた期間であり、そのために授業は一時中断されていた。授業への直接的な参与観察ができなかったが、法会における実践的な側面についての考察を行うことができた。この法会は二回行われており、一回あたり1週間続いていた。今回の法会では女性仏教学院の学生は主に「薬師壇」と「大壇」、男性仏教学院の学生は「華嚴壇」（場所による唱える経が違う。「薬師壇」なら薬師経を唱える場所である）を担当する。「薬師壇」を例にあげて簡単に紹介する。「薬師壇」では一人の女性僧侶が約20人の学生を指導して管理した。毎日の午前5時半、午前8時、午前9時20分、午後2時、午後3時20分と夜7時30分に1時間の薬師経が唱えられていた。学生たちは参加者の受付と案内、秩序の維持、法会の準備と片付けなどを担当した。また、授業で学んだ仏具の使用、飾りの作り方などを実際に実践した。

③布教能力

スピーチを通じて人々の心に響き、自分の意思を理解させることができる。これは布教者にとって不可欠な能力なので、学院ではスピーチ力を鍛える授業がある。表2はS寺で展示されるかつての学生の布教講演評価基準表に基づいて作成されるものである。評価の基準にはスピーチの内容（30%）、風度（30%）、教具の使用（10%）、声のトーン（15%）、身振り（10%）と時間（5%）によって構成される。点数の分布を見ると、「聴衆に適応する」「聴衆を引きつける」といった要素に重きが置かれていることが明らかにした。これはスピーチの中で聴衆とのコミュニケーションが最も重要視されることを示している。

表2 学生布教講演評価基準表

点数	評価の基準	区分	講演者	学生布教講演評価基準表
4	1、人の心を動かすテーマ	スピーチの内容 容 30%		
4	2、段落が明確			
4	3、言葉遣いとあげた例が適切			
4	4、タイミングよくハイクライマックスを形成			
4	5、鋭い分析力			
4	6、文章の構造化			
6	7、聴衆に適応する			
5	1、服装が整う	風度 30%	テ ー マ	
5	2、振る舞いが堂々とする			
5	3、態度が落ち着く			
5	4、表情が自然			
5	5、元気はつらつとする			
5	6、感動的で、誠意がある			
5	1、適切な使用	教 具 の 使 用 10%	時 間 の 使 用	
5	2、効果がいい			
3	1、発音がいい	声 の ト ー ン 15%		
3	2、高低が適度			
3	3、熱情に満ちる			
6	4、聴衆を引きつける			
2	1、スピーチの内容を効果的に組み立てる	身振り 10%	場 所	
2	2、高低が適度			
2	3、タイミングよく変化する			
4	4、聴衆を引きつける			
5	適切に把握する	時間 5%		
	合計			

(3) 親切さと威厳さの間に位置する僧侶らしさ

丹羽 (2019) は化粧を1つの切り口として伝統的な僧侶らしさと女らしさの間にある日蓮宗女性僧侶を対象に新たな僧侶像を模索した。今回の調査では、女性仏教学院では僧侶らしさをめぐり一見矛盾した2つのトレーニングが明らかにした。1つは、頭上に水を入れた



図 1 S 寺院で展示される威厳訓練の様子

茶碗を置きながら落ちついた歩き方を練習する威厳訓練である。もう 1 つは、女性仏教学院の東側の建物の一階のみ長い鏡があり、それは笑顔練習の教具だと言われる。威厳を持つ僧侶は近づきにくいとされる一方で、笑顔は親近感を表現し、他者とのコミュニケーションを円滑にする助けとなると言えよう。

7. 考察

(1) 厳しい男女の峻別

調査時点では、出家者と在家者を含めて、女性仏教学院には約 100 名の学生が在籍しており、男性仏教学院には約 20 名の学生が在籍している。空間的に見ると、女性仏教学院と男性仏教学院は徒歩 10 分離れている。女性仏教学院に隣接した建物は観音菩薩を祭る場所であり、女性学生による管理されている。男性仏教学院は水陸会と春節の年に二回しか開放されていない。学院内には文殊菩薩が祀られている。食事の際に、女性はホールの左側に、男性は右側に座っている。入学式や卒業式、あるいは合併授業（住職の開示など）のみ女性仏教学院と男性仏教学院の学生が一緒に参加する。また、両学院の教師は別々であり、互いの科目を履修登録することは禁止されている。そして、男女、学年を問わずに、全員が互いに「学長」（男性の先輩）と呼び合う。

仏教のジェンダー不平等を解決するためには、男性僧侶の参入が必要だと主張した研究者がいる（川橋 2012）。また、男女峻別によってジェンダー平等に関する合意形成の場が形成されにくくなる。そのため、厳格な男女峻別が仏教における男女の不平等を再生産・加担する可能性があるのではないかという結論が出されることもある。しかし、台湾の比丘尼の活躍を見ると、こうした仏教学院の男女峻別は決して簡単に男女不平等に回収されるわけではない。

(2) 女性リーダーシップの育成

1960 年代に仏教学院が創立された際、台湾社会における女子教育はまだ普及していなかった。女性にとって、仏教学院は教育を受ける機会の 1 つとなった。そのあと、仏教教団の社会教育事業が発展する中で、仏教学院を卒業して仏教系大学に進学し、高学歴を持つ比丘尼も増えてきた。その際、仏教学院は従来の価値観に挑戦し、女性に教育の道を開くことで

あり、「ジェンダー平等」の教育機会を促進する面が見える。しかし、現在では女性教育が一般化しており、その背景において女性仏教学院の役割を再考する必要性が生じている。

ここでは波頭（2008）のリーダーシップの3要素—能力、人間性と一貫性に基づき、女性仏教学院のカリキュラムを中心に考察する。まず、能力における意思決定力、実行力とコミュニケーション能力の3つの要素がある。グループリーダーは日常生活で先生の指示やグループの任務を達成するために必要な知識やチームワーク、思考力などを養い、グループを目標達成に向けた意思決定力と実行力を鍛えている。また、コミュニケーション能力については、布教講演の練習を通じて、相手に共感を呼び起こさせることができる。人間性には愛情と倫理が含まれている。人の性格を変えることが難しいが、言動を変えることで人間性を表現することが可能である。女性仏教学院では笑顔の練習によって人間性を鍛える。最後に、一貫性では時間的一貫性、関係的一貫性と状況的一貫性がある。前文で紹介したように、仏教学院は集団生活である。自分は僧侶らしい振る舞いを改善する意識を持ちながら、他人の監督を受けているため、一貫性が維持されることができている。例えば、参与観察では慌てて走ったり、物を運ぶ際に服装が乱れたりすると他者から注意されることが観察された。どの場でも自分の行動を常にコントロールする習慣が身に付いている。こうしたリーダーシップが鍛えられた女性僧侶はマレーシア、フィリピンなどの発展途上国における多様な社会参加実践を行なうと同時に、A山の影響力を拡大しつつ海外からの学生を募集している。そして、台湾の仏教学院での教育を経て、さらなる布教人材となる道が開かれている。

8. 今後の研究への展望

今回の調査では、台湾南部のK市に位置するA山の仏教学院に対する参与観察と関係者への半構造化インタビュー調査を通じて、ジェンダーの視点からA山の布教人材の育成状況と一部の海外布教との連動を明らかにしてきた。また、それを踏まえ、これから台湾の教団であるA山の多様な社会参加実践を多面的に考察し、とりわけその社会参加実践の中核を担う比丘尼の実践に注目し、ジェンダーの視点から仏教の現代化の特徴を実証的に分析していく予定である。ただし、厳しい男女峻別により、男性仏教学院に関する情報を手に入れるのが難しい状況なので、ほぼ女性仏教学院に焦点を絞って考察してきた。そして、仏教学院の人材育成と発展途上国の社会参加実践との連動を理解するために、発展途上国での調査も必要不可欠である。今回の調査は仏教学院側に焦点を当て、文献資料と関係者の半構造化インタビュー調査などを通じて、その連動は浮き彫りにしたが、その点についてさらに厳密な調査が必要である。今後は、男性仏教学院や教員としての海外布教者などを含め、より多角的な視点からA山の布教人材育成を考察しようと思っており、これを今後の研究課題として取り組んでいく。

参考文献

- 川橋範子 (2012) 『妻帯仏教の民族誌：ジェンダー宗教学からのアプローチ』 人文書院。
- 丹羽宣子 (2019) 『「僧侶らしさ」と「女性らしさ」の宗教社会学：日蓮宗女性僧侶の事例から』 晃洋書房。
- 波頭亮(2008) 『リーダーシップ構造論』 産業能率大学出版部。